



●小山田越中守信有画像
享禄3年(1530)越中守信有のときに中津森の館が炎上したため、天文元年(1532)谷村に新居館を建て、桂川を隔てた「勝山城」を要害城としていたことが最近の調査で明らかになっている。

群雄割拠の時代に生きる



奈良時代に入ると、都留市域にも律令体制となった畿内の勢力が及んできます。平安時代に編さんされた『和名抄』によれば、律令制下の甲斐国都留郡には「相模・古郡・福地・多良・加美・征茂・都留」の七つの郷が記録されており、このうちの上、下谷村を中心とする地域に「多良郷」が、十日市場から上に「加美郷」が置かれていたと推定されています。いっぽうで、東国を中心に政府に敵対する新興の在地豪族があらわれ、やがて十九世紀まで続く武士団による軍事政権の時代を迎えることとなります。

武士が政権を握る鎌倉・室町時代を経て、応仁の乱を契機とする争乱の時代を迎えます。甲斐国では、北巨摩地方から甲府盆地一帯を清和源氏の源義清・清光父子を祖とする「武田氏」が登場、都留市域では、坂東八平氏のひとつ秩父氏の流れをくむ「小山田氏」が中津森に居を構えて勢力を伸ばしていきます。

都留郡内最大の国人領主として守護武田氏と対等の同盟関係にあった小山田氏ですが、武田信昌に嫁いだ小山田信長の妹の産んだ油川信恵と武田信縄とが家督を争い、小山田氏は信恵側について何度か国中に出兵しました。しかし、信縄の子の信虎によって信恵が戦死したことで争いに終止符が打たれ、小山田弥太郎は

討死し、平三(のちの越中守信有)は葦山の北条早雲のもとに逃れました。

永正七年(一五一〇)国中と都留郡との間に和睦が成立し、小山田越中守信有が信虎の妹を妻に迎えています。この後、信虎の直接的な都内介入とともに武田氏被官となり、同時に郡内領で保持していた領主権の多くを武田氏によって安堵されていたものと考えられます。

しかし、長篠の合戦での敗戦以降の武田一族の衰退ぶりは止まるところを知らず、天正十年(一五八二)三月七日(二十四日という説も)には小山田信茂は甲府善光寺で織田氏によって殺され、三月十一日勝頼は天目山で自害。こうして小山田氏は武田とともに滅亡します。